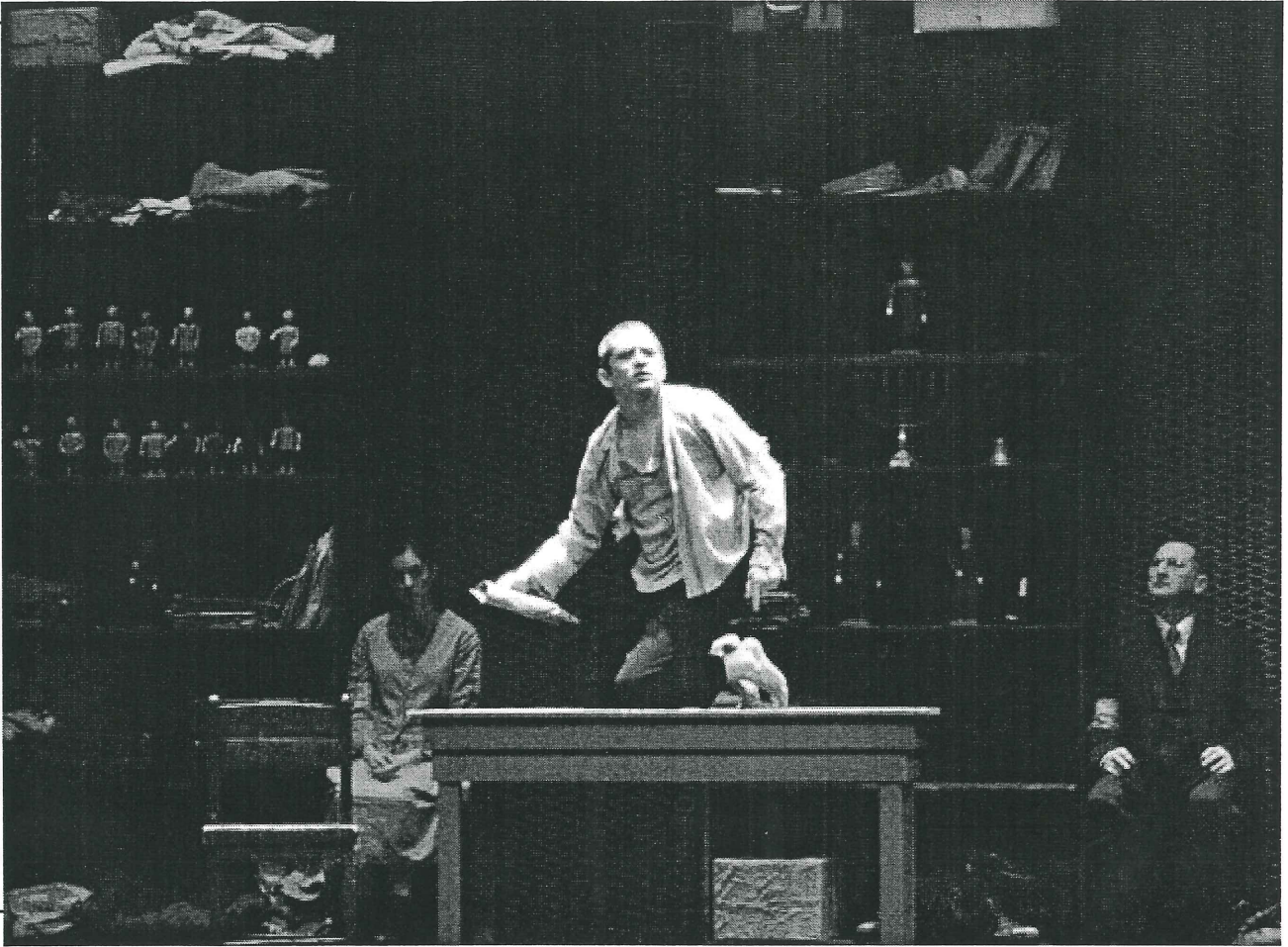


DRAMA かながわ

《神奈川県演劇連盟》 ★ 231-0042 横浜市中区福富町西通り 52 TEL045-261-4866

スコットランド・ランディールレップシアター公演「コルチャック先生の選択」



大きな感動を残して

海外3劇団・国内8劇団が競演

14年ぶり横濱世界演劇祭開催

みんなで作った世界演劇祭
また日本にきたいと言ってくれました

横濱世界演劇祭2006はたくさんさんの感動を残して終わりました。

準備を始めてから3回の演劇連盟総会を経て行われ、足かけ4年、何もかも始めての経験にとまどいながらも、本当にたくさんさんの皆さんのご協力をいただいて創り上げることが出来ました。

その過程で、ひよとしたら、開催出来ないかもしれないという事態にも何度か遭遇しました。

たとえ幾らかでも必ず出るだろうと信じていた文化庁の助成金がダメだったこと。この時のショックはとても大きく、断念するかどうかを問われました。神奈川県との支援と各会場の支援がなかったら多分ここで終わっていたでしょう。

演劇連盟の中からも危惧する声が上がりました。誰もが初体験の事務局の中で、こうすれば出来るんじゃないかと確信に満ちた答えを出すことが出来なかった力のなさも大きな理由ですが、それでも走り出したこの企画の意義は大きいと、何とか乗り越えてきました。

韓国で劇団超人にであり、沖縄でデンマークの作品にであり、協力を得て翻訳した「コルチャック先生の選択」は、その作品の豊かさに打たれました。

3本の作品はどれも小振りだけれど、何処にも負けない良い作品が揃ったねと、演劇に理解の深い人から言われると、これなら大丈夫、いけるかも知れないと勇気が湧いてきました。

それぞれの舞台はとも豊かで、気持ちの良いものでした。海外公演は2500名の方が観てくれました。そして何処の国の俳優達も「また日本にきたい」といつてくれました。

この世界演劇祭をどう受け止めるか・・・、私には社会と真つ直ぐに向き合っている劇団と俳優達と作品、という印象が強く残っています。(山本)

コルチャック先生の選択

ダンディ・レップ・シアター (スコットランド) 公演

2月24日19時 25日14時・19時 26日13時・17時

会場 磯子区民センター・杉田劇場

身動き出来ない感動

コルチャック先生のお話は、以前から聞いたり映画で観たりしているが、スコットランドの王立の劇団が持ち込んだ舞台は素晴らしい作品でした。

三人の俳優がいくつかの配役を演じ分け、子ども達を人形で表現するという手法は決して新しいわけではありませんが、重厚に仕上げられた舞台と、すごく自然ですこしの無駄のない俳優の動きに最後まで目を離すことができませんでした。

ナチスに抵抗していく少年アジオと最後まで無抵抗で生きるコルチャック先生の狭間で揺れ動く少女ステファニー。この対比は重たいテーマを展開しながらも生きることの大切さを静かにそして深く感じさせてくれます。終幕の収容所に向かう場面で、コルチャック先生は小さな人形達を机に並べながら声をかけます。

子ども達(人形)が胸を張って手をつなぎ列車に乗り込む様子は身動きが取れない感動をおぼえました。

字幕のわずらわしさもありますが、日本でこの舞台を見れたのは横濱世界演劇祭にお礼を言うしかありません。

(団のぼる)

そしてこんな話しも

スコットランドの舞台空間の全責任を任されているマイクがやってきたのが、公演4日前。

4日間で道具を全て作るのだから、それほどのものでは・・・プランを聞いて我々は、ただ啞然。マイクは来日すると、すぐにホー

ムセンターへ、直行。材料調達が始まる。

そこで問題になるのが、サイズ。畳サイズ

(我々の間の共通語)とヤードサイズ。彼の要求するサイズは日本の普通の店では手に入らない。時間も無い。そこで、某大手の建設会社に直接頼み込んで手に入れた。てんやわんやの大騒ぎ。何とか手に入れたのだから、日本側のスタッフもたいしたものだ。マイクの要求は、まだまだ続く。買い込んだ材料の膨大な事・・・何度軽トラではこんだことか・・・それでも、日英合同の道具作りは見事、全て妥協なく、思いど通りに完成。熱き握手。

そして、仕込み当日は、小道具の調達。花に生地・そしてニンジン・ジャガイモ・りんごに・・・。ダンディーのメンバーと杉田の地元劇団のメンバーは、スーパーや花屋、生地屋と、時間に追われながらも、和気あいあいと、買い物が続く。道具のほとんどが現地調達、スコットランドの手法は、買い物を通しての日英親善を作り出した。

そして、忘れてはならない事は、思わぬ人手不足に、杉田劇場舞台部全員での仕込みの手助け。本当に、感謝、感謝。(横田和弘)



汽 車

劇団超人(韓国)公演

3月4日14時・19時 5日13時

会場・青少年センターホール



もう一度みたいな

心が弾んだ! いいものを観た! 面白かった! 観劇後の素直な気持ちは、こんな感じです。

セリフのない芝居。もちろんハングルはわからないのだからセリフがあってもわかりません。しかし、この芝居は身体を思い切り使って、言葉を表現していました。青少年センターの大きな舞台を縦横無尽に使って、躍動感溢れる動きでした。

物乞いの少年少女が元締めめに責められるところは、人をおんな風に飛ばす? ことが出来るのにびっくり。また、大道芸のようなコミカルなこともやってのけ、たくさん楽しませていただきました。

身体だけではなく、顔の表情、しぐさ・・・それらがすべて語っていました。元締めの傷を負ったあとの動きなど

は実に繊細でした。

彼らの動き一つ一つが何かを言っているようで、見逃したらわからなくなってしまうようで、いつもより見るということに集中していたように思います。

言葉ではなく身体表現だけでこんなにもたくさんのが伝わるんだ、台本に書いてあるセリフにいかにも普段頼りすぎているか、ということであらためて思い知らされました。

ただ私は前の方の席で観ていたので表情などがよくわかりましたが、後ろの方の席だと少し分かりづらかったかもしれません。青少年センターは、彼らのダイナミックな動きにはとてもいいかもしれないけど、細かな表情、感情を感じ取るには少し大きすぎる舞台のように感じました。

それと、音楽・音響効果もよかったです。彼らの動きを盛り上げていて効果的でした。

もしかしたら、セリフのないぶん、音ってこのお芝居のとても大事な要素なのかもしれません。役者でない、もう一人の出演者みたいに感じました。

もう一度観たいな、他の演目も観てみたいなと思いました。え、それってやっぱり、韓国に行かなきゃダメかな？

(劇団河童座 高島明子)

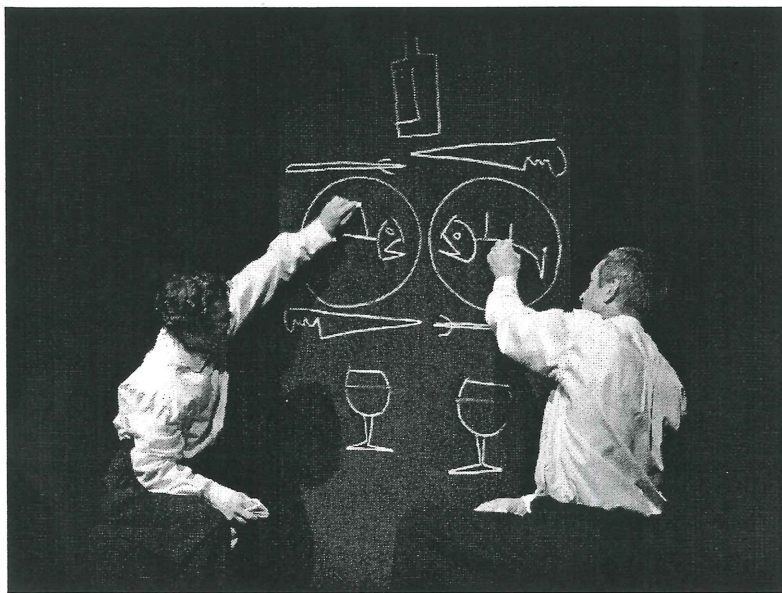
そしてこんな話しも

超人のメンバーは、全劇団員で仕込む。照明・音響・大道具・小道具・衣裳にいたる全てを、キャスト・スタッフの区別なく、汗しながら全員で準備をするのだ。我々、連盟の劇団の仕込みスタイルが一番近かったのが、この韓国「超人」だった。鉄で出来た折りたたみ式の梯子や、大ホリ幕や袖幕まで全てを、手荷物扱いで持参してきたのには、驚かされた。行動といい、芝居の中での運動量といい、食欲といい、全てに於いて、アグレッシブで、若々しいエネルギーが彼らの芝居の、全ての源なのかもしれない。

是非知ってほしい話がある。仕込みが一日しかなく、大幅に仕込みの時間がおくってしまった。特に難儀をした照明のデータの打ち込みが終ったのは、なんと青少年センターの閉館時間をもう、30分もオーバーしていた。韓国側から、30分だけキッカケをやらしてもらえないだろうかとの、申しわけなさそうな申し出があった。そこに、鶴の一声。「どおせなら、中途半端にやらずに最後まで通しなよ」と、舞台部、浜田氏。そして、ゲネが終了したのが11時をはるかに超えていた。勿論、「超人」のメンバーは大喜び。この一言が、日韓の距離を、一気に縮めた。勿論、本番の裏での日韓共同のスタッフワークは、上手く行かないはずはない。本当に、センター舞台部には 感謝・感謝。(横田和弘)

ディッター〜であい〜 シアターTEATRET (デンマーク) 公演

3月3日 14時・19時 4日 14時・19時 5日 13時・17時 会場・赤レンガ倉庫劇場 1号館ホール



国々の言葉のカベの向こうに広がる、共通の言葉を探し求めているという、デンマークのテアトレット。

表現手段として削ぎ落とせるもの(装置、照明、効果、小道具)は落とし、最小限、必要不可欠なもののみ、しかもそれ等全てに台詞の代わりと言っても良い程の意味を持たせている、練って練って練り上げた作品、ユーモアも充分散りばめてたった二人だけで演ずる、人間賛歌。

台詞に頼っている我々に与えられたショックと課題の何と大きい事。言葉なんて使わなくても伝わるんだよ！自分の率直な感情表現の手段を間違えなければ……。

と彼らの主張を突きつけられている気がした。自分には無言劇なんて100%不安で、とてもとても挑戦なんてできない。しか

し憧憬だけはある。あの研ぎ澄まされた舞台上の時間に……。

2006横濱世界演劇祭の海外招聘3劇団は全て心から絶賛するにふさわしい劇団でした。実行委員会の皆様の芝居眼は確かだと拍手を贈ります。

良い芝居をありがとうございました。(蒼生樹・勝碯若子)

そしてこんな話しも

全てに於いて大人を感じさせる劇団が、テアトレットだった。一番手がかからなかったのが、「ディッター」日本側が用意した道具類にもなんの、注文もなく、全てが「パーフェクト」の答えが返ってくるばかり。社交辞令かとおもえるほどだったが、後で聞くと、本当に何処の国にいてもこれほど注文通りの道具を揃えてくれる国はないとのこと。日本側スタッフの印象を高めてくれた、道具製作者の森さんをはじめお手伝いいただいた方々に、ただひたすら感謝、感謝。

さて、本番前日に、テアトレットのメンバーから「これからは、劇場空間の中には誰も入れてくれるな」との申し出があった。この申し出は、全公演の客入れ前30分前にも実行された。関係者も、劇場の人間も全てがオフリミット。かれら3人だけの空間となった。そこで行われていたのは、稽古ではなく、音楽を流しながら、体を動かし続けたただひたすら本番への集中力を高めている姿だった。ゆっくりした時間の中でストイックなまでに自分を追い込んでいく姿には、さすがプロと、ただ、ただ、感動。モニターでその姿を見ていた私は、深謝。(横田和弘)

横濱世界演劇祭2006では、海外3劇団の招聘と共に、エデュケーションプログラムとしてシンポジウム、来日劇団によるワークショップ、国内劇団によるワークショップを用意しました。以下はその報告です。

シンポジウム 指定管理者制度と演劇の公共性



今回のシンポジウムでは、衰退した地方工業都市であるスコットランド・ダンディー市が文化都市として再生していく基盤となったダンディー・レップシアターの公演および教育やコミュニティに対する活動が紹介された後、指定管理者制度が日本の公立文化施設をどう変えていくか、どのような方向に進むべきなのかをテーマに据えて各パネラーによる議論が進みました。

パネラー

ローナ・デュグイット

(ダンディー・レップ・シアター
エグゼクティブ・ディレクター)

大野 晃 (神奈川県民ホール館長)

西川 信廣 (文学座・演出家)

特に指定管理者制度がコスト偏重主義に陥る可能性をもっていること、また行政がそのことに終止して、公立文化施設に本来託すべき使命があまり明確に語られていないなどが問題点としてあげられました。

参加者からは、指定管理者制度の導入によって、入場者数などの量的な面が重視され、提供される作品の質がどんどん低下していく可能性があるのではないかと、また、管理運営の状況についてどのような基準が設定され、誰が評価していくのかという疑問があげられ、パネラーからも実際に質の低下は起ってしまうであろうということ、さらに評価については行政、民間など完全な外部の人による評価など、複数の立場から行われべきだろうという意見や、行政の評価はなるだけ排し、利用者もしくは受益者の評価をしっかり基準として判断していくべきだという意見も出されました。(横山歩)

劇団超人による 身体表現のワークショップ

講師・パク・ジョンウイ (劇団超人演出家)

日時・3月5日10時 会場・県立青少年センター多目的プラザ



午後の公演を控えていながら劇団員全員が参加して、国内の参加者と一緒に展開するワークショップでした。

始めは体を動かします。「劇団はこれからやるようなことを朝の10時から夜まで続けて行うといいます」と通訳

の金さん。とにかくハードで国内の参加者はとても付いていくことが出来ません。しかし彼らは当たり前前にトレーニングを進めていきます。中でも体を動かすことと声を出すことを民族的な動きで旨く組み合わせたレッスンは時間の限られた俳優にはすごく効果的で参考になりました。

エチュードは日本でよくやられるものと大差はありませんが言葉が通じなくてもこうやって一緒にワークショップが出来るのは参加したものにしか味わえない体験だという声をたくさん聞きました。(横田和弘)

コルチャック先生の選択 ワークショップ

講師・スティーブン・スモール (ダンディー・レップ)

日時 2月25日10時(中高生対象) 26日10時(一般)

会場 磯子区民センター・杉田劇場ロビー



昨年の9月のプレ企画として行ったカリキュラムと同じ内容でしたが、今回はワークショップの後は実際の舞台を観劇することがセットになっています。スコットランドではこのようなワークショップをセットにして学校や地域で

コルチャック先生を上演するのだそうです。一切抵抗できないグループ、徹底的に苛め抜くグループ、どっちでも良いという選択は出来ない条件を表現していく、タッチする側と逃げる側、無視する側と茶化す側、死を前に何をするか。短い時間帯に休みなく要求を突きつけられて行動していく参加者はやがて、子どもの権利条約までが用意され読み上げることになります。当然体験したことはコルチャック先生の舞台に移行していくわけですが、日本では決して見る事ができません。教育に演劇のある国のワークショップでした。

(勝碯若子)

小さい子どもとお母さんのためのワークショップ

講師 小森創介（演劇集団 円）
会場 県立青少年センター練習室
日時 2月17日11時



広い練習室に親子が10組ほどの実験的なワークショップ。小森創介がチャレンジする子供たちはとにかく元気。走り回る子どもに周囲を気にしながらどうしましょう？と追いまわす親。そんな雰囲気なかで

一人一人に歌いながら声をかけていく小森さん。うた遊び「げんこつやまのためきさん」でどこまで子ども達が集中してくれるか。子ども達は遊びの天才だからおとなの感性だけではやっぱり負けてしまう。これはかなり手ごわいと理解したのは私だけではないでしょう。保育園の延長とは一味違う狙いは舞台を親子で一緒に観て体験できるそんなワークショップを目指しているようだ。さあ次の公演「どうぞのいす」にどうつながるか楽しみにする。

異文化を演（や）るワークショップ

講師 吉田重行（ストーリーレーン）
会場 県立青少年センター練習室
日時 2月28日17時30分



今回の世界演劇祭に関連し、世界のまだ知られていない文化や言語のある事に注目し、さらにそれぞれの言語で同じ意味の言葉を発した時にどう違うのかを体験するのも面白いだろうと、神田外

語大学の生徒達が中心になって「異文化を演（や）る」というワークショップを企画した。表現する作業と異文化を課題にする作業の2つがあったが、先ず表現のワークショップから始まった。仲よくなるどころから、課題を設けてその世界を創る作業だが、その課題に、世界の事情に違った風景を入れ込んだ。英語、韓国語、スペイン語、インドネシア語、ポルトガル語を課題にし、それぞれの国のお正月をどう創るか、静止画像を組み立てた。文化の違いにまで切り込めたところは少なかったが一つの試みとしては面白かった。

終演後の交流も行われました

海外3劇団の公演の終了後、観客との交流が行われました。

コルチャック先生の選択では、終演後舞台に出演した3人の俳優が出て、観客の様々な質問に答える時間を作りました。毎回熱心な観客が大勢残って、スコットランドにおける学校演劇の実体やコルチャック先生の選択の世界とそれぞれの泰者の気持ちなどに質問が集中しました。

ディットーの終演後は2人の訳者とスタッフがロビーに出てきて観客の質問を受けました。

繊細な舞台を観たあとだけに言葉のない作品の持つ説得力と必ずしも誰もが同じ感性で受け止められないところなどもあり、質問が沢山出ていました。どう受け止めたらいいいのかという質問には、「どれが正解ということではない。それぞれの皆さんが受け止めた

感じ方で良いのではないのでしょうか」と、自由に解釈して良いのだと答えていました。デンマークでは大人と子どもと一緒に観劇する事はなく、今回の日本でも公演が小学生から大人まで一緒に客席にいた事は初めての経験と話していました。

韓国の舞台でも、終演後演出家が舞台に出てきて、作品について、作品が生まれる経緯について等、観客の質問に答えました。またロビーでは同時進行で出演俳優の観客との交流が行われました。たくさんの通訳の協力もあって、出てくるお客さんと感想を話し合ったり、一緒に写真を撮ったりするなど賑やかな交歓が行われました。もの凄いエネルギーな舞台を終わったばかりなのに、息も切らしていない俳優達の訓練のすごさに驚いている観客もたくさんいました。



神奈川県演劇

横浜世界演劇祭の一環として「神奈川演劇博覧会」が開かれた。

演劇博覧会そのものは3年目になる独自の催しだが、世界演劇祭と同時期の開催であり、ここに参加する作品も世界演劇祭の一環として様々な演劇が渦巻く『演劇の日常化』を課題にした祭典に相応しいのではないかと言う事になった。

今年は全部で11劇団の申込があり、全部取り上げた。従来の土日の公演だけでなく木曜日・金曜日の夜の公演も設定したことで全作品が参加出来た。世界演劇祭もこれにより幅広い豊かなものになった。以下は参加した劇団の紹介と寸評である。

郷マイムプランニング 「パントマイム in 横濱」 (郷田ごう・明日可：作)

明日可さんと郷田ごうさんのそれぞれのパントマイムを見せた。

明日可さんはパントマイムと1人芝居と布作品を組み合わせて作品にしている。

最初の誕生は若芽が伸びていく様子や雛がかえりや

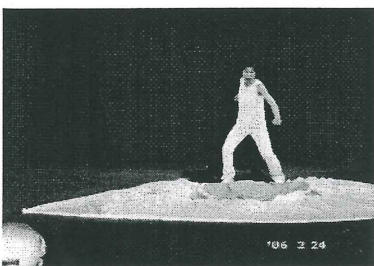
がて大空に飛び立つ様子をマイムで演じた。彼女のしなやかな身体と鍛えられた姿勢は鼓動が聞こえるようで素晴らしかった。待ち人と題した1人芝居は老婆を演じた。電報をもらって朝から桜の咲く停留所で待っている彼女だが最終バスが出て待ち人の来ない。電報はずっと昔のものかも知れない。電報を握ったまま眠ってしまい昔の夢を見る。彼があらわれ、彼女の顔は輝く。大きな布でできたドレスをまとうとそれに伸びていく。天国に飛び立つように。

郷田さんは閉まるというテーマと当たるというテーマで演じた。日常のそれぞれの状態を拾って演じるのだがコミカルで面白い。しかし観ている方としては物語があった方が良いなと思った。(山本忠利)

パフォーミングアーツ・プラン 「都市伝説」 (構成・演出：和田祐子)

パンフレットには「船が出る男と女をのせて…愚かしさはめぐる 愚かしさをのせて、船が出る」とある。馬とネコ婆と男と女を乗せて船が出航する。船の中の物語と思うが、そこでは馬とネコ婆がいて人間の言葉を話す(擬人化ではない)。

先生と呼ばれる男は骨相顔の研究で与えられた資料からこれは馬が書いたと記されているがおかしいと問題提起をする。女はそれをいさめてここが現実だからという。あとはその繰り返しである。だんだん男の発言を押さえられなくなる。女は馬からしっぽを外し、研究者だった男に付け替える。研究者が馬になり馬が研究者になり、またこれを繰り返すのかというネコ婆にそうだという女。舞台は幕開きと同じ就航の場面になる。この船は愚者の船だという。自由への意思、正義への思い、お前の意思をもたないお前とは何だと問いかけたいのか？(山本忠利)



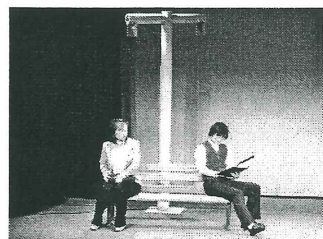
劇団かに座 「花いちもんめ」 (作：宮本研・演出：馬場秀彦)

中国残留孤児が日本に来て肉親を捜す話は今も続いている。しかし母親が名乗り出た事はないと言う。自らの子を中国に置き去りにした母親は、その子の前に顔を出す事ができないのだと言う。花いちもんめはその母親の1人語りだ。肉親探しに来ているその時期に、その渦中から逃げるように遍路の旅に出た女が、とある休憩の場所でだろうか、身の上話を始める。初めはちょっと見得をはって中国の暮らしは良かったと自慢をするが、そんな嘘も見抜かれ、ぼろぼろになって子どもを亡くし子どもを捨てた過去を語る。船越さんは軽妙な語り口で好演した。(山本忠利)



すいしん「公園」 (作・演出：エミリオ☆)

公園を舞台にショウちゃんに心を寄せる女の物語。彼女は可愛がっていたネコのショウちゃんが死んでしまった事で毒を飲まされたと錯覚する。死ぬ前にはき出したキノコから誰がやったか突き止めようとする。その公園で今度は花を愛するショウちゃんに巡り会う。その彼女となったショウちゃんとのところまうまいかない。公園のベンチで悩み続けるが、ショウちゃんも悩んでいる。事情を率直に話せないのだ。そこに2人の縊りを戻すのと手伝う請負人が現れる。請負人の女性は2人にあってそんなくよくよしないで電話してしまえとけしかけるが、なかなかそうならない。請負人は男に鈴を与える。鈴を振ると障害になっている事が一つずつ解決していく。公園を立体駐車場にしようとする男とそれに絡む役所に男も鈴によって暴かれる。出演者はそれぞれ頑張っていたが、時間の進み方が前後し物語はちょっと分かりづらい。(山本忠利)



まりこ☆みゆーじあむプロデュース「部屋=ROOM」 (作：原田一樹・構成演出：川井真理子)

オムニバス風なドラマ2つ。かつては同棲していたと思われる男2人が、元の部屋で対する。出ていった男の執拗な追求に、自分の意見を言えない男。犬にたとえて従順であることへの嫌悪と人への悪意を植え付けようと企む男。遂にはじけた弱気男の逆襲。強気男の強烈な個性と、落ちついた話しぶりが、心の底を伺わせないしたたかな男を感じさせてくれた。人の深部に潜む暗い欲望を感じさせる舞台だった。

もう一本。成田離婚(?)で元の家に戻ってきた女と、留守を預かったが自分も離婚をしてホステスになろうとしている女の話。それぞれの家庭でのすれちがいを無視して自分に気持ちを訴え続ける2人。夫からの電話にも無視し続ける2人。

(劇団麦の会 山元洋一)



博覧会開催

横浜小劇場「捨骨」

(作：市瀬佳子・演出：長谷川則彦)

町ぐるみが非常に親密な村の、お寺が舞台。冒頭は火鉢で餅を焼いて食べているシーン。灰に落とした餅をもったいないと口にする女子学生。その心の中は……。

本堂を開放してカラオケクラブが開かれている。都会に出ていた近所の女子学生が帰省して尋ねてきた。日頃の何気ない会話にもちょっと暗さが感じられる彼女。住職の娘の女子高生との話の端に、急逝した友達のことが話されて……。忍ばせた彼の遺骨のかけらを吊ってほしいと住職に頼むが、形ではなく自分の心根である、と諭され、火鉢の灰に落として回向する。そこへ馴染みの菓子屋のおじさんが餅を持参して尋ねてきた。

若い役者が年配の役を演じていたが、姿は無理として話し方に工夫が感じられた。(劇団麦の会 山元洋一)



劇団きさく座「結婚したい医師(おとこ)たち」

(作・演出：石井健二)

今風に合コンなんだろうと思った。結婚を前提に医師と付き合おうとする女性達との出会いを提供する場に、3人の医師達

が次々と現れてそれぞれの結婚観を披露する。20回の参加を重ねる北里と母親の死ぬ前に結婚を、と決意した諸星とは同窓であるらしい。若い南雲は先輩医師の結婚相手がこの種の見合いで出会ったと聞かされ、自分もと熱望している。過去の出来事(北里の妻の自殺)が話され、そのことの疵が同窓の2人に微妙な影響を与えている。「開始10分前です」と現れたスタッフがもたらしたのは、出身大学別に控え室があり、ここは最下級ランクの部屋であるとのこと。それでもと、パーティー会場へと向かう3人……

人の流れが少し不自然だったのと、この短さでは人間同士がもつそれぞれの感情まで表現できず、意図が図りきれなかった。

(劇団麦の会 山元洋一)

移動する羊「オボロケ」

(作・演出：愛川武博)

暗い舞台に白い箱と箱状のぼんぼりが薄く光る。人物が出入りし会話がはじまると、そこは「一軒のお店」だとわかる。然も美しいママのいるバーだと判る。集まってくる客たちは常連と見えるが、一見の客が一人。空中庭園のそそり立つ森のような木々は暗闇にのみ込まれて、人間の情念だけが舞台にうごめく。そんな叙情的な芝居だった。

(飯田克衛・横浜演劇研究所)



劇団横濱にゅーくりあ

「DON' T TOUCH ME

～俺にさわると危ないぜ」(作・演出：泉谷渉)

ヨコハマを舞台にしたヨコハマ・オリジナル・シアターを展開しているこの劇団の、前代表泉谷渉の作・演出で久々に放つにゅーくりあわーど。おかまが出て観客の興味をそそるが、山手の高級レストランの厨房という設定も、殆ど舞台装置がないのだからなかなか「高級」は感じられない。結局は反米の思いをを正面向いて怒鳴るシュプレヒコールが、安保と戦ったおじさん、お兄さんたちの青春のノスタルジーといった案配の芝居だった。

(飯田克衛・横浜演劇研究所)



演劇披露ウツボ団

「サンシャイン・ベイビー」(飯島大脚本・演出)



パンフに載っていた台本の一節はこうだ。”とある結婚披露宴会場、開始を待つ参加者たちの中にかかない顔の男が一人……”そうして入り口で案内をする男が一人。舞台は旧友である二人の短い会話のやり取りで進行する。芝居を巡る過去を語り合いながら現在を浮

き彫りにする劇作のうまさ、男二人の感情の起伏を上手く表現つつ、芝居の世界への二人の思いの違いが再びこの二人を隔て、殺人にまで至る激しさを静かに描いた。

(飯田克衛・横浜演劇研究所)

劇団辻シアター

「色気虫は色気好き」(辻三太郎作・演出)

出演者は色気虫という人間の色気を食べて生きている虫で、その虫たちの色気を食べるためにとりついた人間が語られる。虫だから虫の扮装なのだが、この色気虫という虫は誠に珍妙であり、いささか恥ずかしくもある。



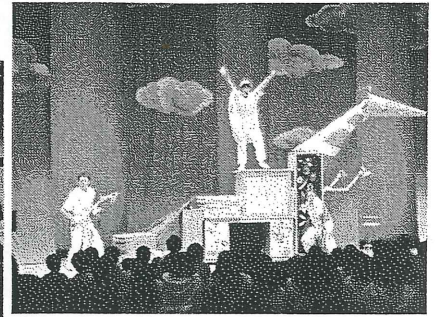
この劇団の主宰者の作、主演(?)で話は進行するが、すごく真面目な劇団員たちと、柳家金語楼の弟子という主催者の芸風(?)の違いが気になるとともに、辻さんはよくやるなあと感じた。

(飯田克衛・横浜演劇研究所)

演劇集団円・どうぞのいす↓

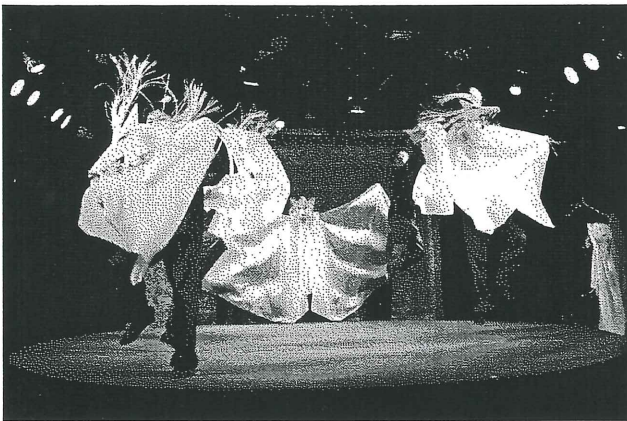


こゆるぎ座・小田原ちようちん



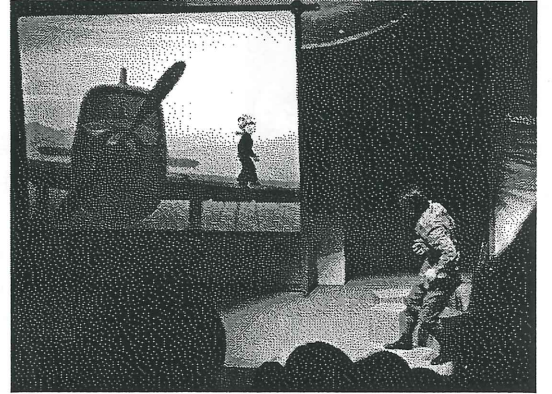
オペラこんにやくざ
あおくんときいろちゃん

↓日本児童・青少年演劇劇団協同組合・春若丸



ポートシアター・賢治讃え

国内招聘劇団の
舞台写真から



←日本ろう者劇団・手話狂言

↑劇団かし座・星の王子さま

スカミュー
ナミとチャルく黒船がやってき



演劇連盟4月～6月の公演予定

劇団河童座 「嗚呼 あっぱれ12人 パート4」 作/演出横田和弘
5月13日(土)14時・19時 14日(日)14時 相鉄本多劇場
劇団葡萄座創立60周年公演 「あかんぼ唄」 作アンドレ・ルッサン/演出山本伸二
5月27日(土)14時・18時半 28日(日)14時 杉田劇場
劇団かに座 「ホテル501」 作越川大介/演出田辺晴通
6月23日(金)19時 24日(土)14時・19時 25日(日)14時 かなつくホール
劇団麦の会 「温泉旅館湯けむりの里〈千客万来〉～花道は大渋滞の巻～」
作/演出山口雄大 6月24日〈土〉13時・19時 25日13時 関内小ホール

神奈川県演劇連盟連絡先など

神奈川県演劇連盟事務所
横浜市中区福富町西通52
横浜演劇研究所内
ホームページ: <http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/>
青少年センター資料室
Tel: 045-263-4400
(演劇資料室呼び出し)